



チヴィタヴェッキア港



## 慶長遣欧使節派遣から400年以上続く交流 絆を再び結び合う「令和遣欧使節2024」

初代仙台藩主・伊達政宗公は、仙台城を建設し現在の仙台市、宮城県の基礎をつくることも、海外にも目を向け、ヨーロッパの進んだ文化を取り入れ、貿易を望む先見の明をもつ大名だった。フランシスコ会の宣教師ルイス・ソテロを正使、家臣の支倉常長を副使に任命して使節団を組織し、使節船のサンファンパウティスタ号を建造。1613年（慶長18年）10月、石巻市月浦から出帆したのが、日本史上初の外交使節「慶長遣欧使節」だ。使節団は、上陸した地であるスペインのコリア・デル・リオ（以下、コリア市）とソテロの故郷であるセビリアで大歓迎を受け、ローマではローマ教皇のパウロ5世に謁見しローマ名誉市民の称号を与えられるなど、外交を育んだ。けれども長旅の間に幕府がキリスト教の布教を禁止したことから貿易は叶わず、常長は1620年に仙台に戻った。

現在のコリア市には、慶長遣欧使節団のメンバーの子孫とされる「ハボン（スペイン語で日本という意味）」姓を名のる人が700人以上暮らしているといわれる。彼らの有志が1980年代から「スペイン・ハボン・ハセクラ協会」を組織して日本との交流を進めてきたが、層関係が深まったのは、東日本大震災直後だ。人々は、市内公園に建つ支倉常長像の前に集まり追悼式を行い、日本の歌を歌い、俳句を詠み、故郷の復興を願った。そして、米国民PO法人「風の環コンサート」が推進する形で、音楽とスポーツを主に新たな文化交流がスタート。コリア市、仙台、石巻、ニューヨークの3カ所を結んだ合同合唱祭や俳句交流会、コンサートなどが行われ

た。2018年、支倉常長家14代当主の支倉正隆氏を名誉顧問に迎え、ハボンさんと文化交流を行う任意団体「ハボン・ハセクラ後援会」が発足し、2019年、サッカーチーム・コバルト・レ女川ジュニアユースの選手を平成最後の遣欧使節団としてスペインに派遣した。

ハボンさんとの交流は、2020年以降蔓延したコロナ禍により休止せざるを得ない状況が続いたが、ようやく落ち着いてきたことから、交流イベントの再開を決め「令和遣欧使節2024」を実施する。2024年は、慶長遣欧使節がコリア市、セビリア市に到着して410年、また使節団の正使を務めたルイス・ソテロ殉教400年。使節団は10月16日（水）に羽田を出発し、9日間の行程でゆかりの地を訪ねる。訪問地はスペインのコリア市、セビリア市、マドリード、イタリアのチヴィタヴェッキア、ローマとなり、各訪問地では、コリア市の式典並びにコンサート、ハボンさんとの懇親会、Japan Weekなどに参加するほか、市内観光など、充実した内容だ。宮城県からの一般参加は20名程度を公募する。

今後も、ハボン・ハセクラ後援会とコリア市のハボン・ハセクラ・スペイン協会が連携して積極的に国際交流を行っていく志は変わらない。400年以上の時を超えて、遠い故郷の宮城県を愛するハボンさんとの交流は、単なる観光旅行とは違う感動と発見をもたらすだろう。「令和遣欧使節2024」に興味がある方は、ハボン・ハセクラ後援会事務局に問い合わせてみてはいかがだろうか。